



阪大の学生や教授は他大学に比べて真面目だと聞きましたが、本当なのですか？



《学生、特に理学部・理学研究科の学生について》

阪大の学生（学部と大学院があります）は、もちろんとも「真面目」です！

多くの学生は講義や実験やセミナーにきちんと出席しています。4年生になって研究室に配属され、さらに大学院に進学すると最先端の研究に従事しますが、日夜そのための努力を惜しません。

特に最先端の研究のためには、与えられたことをこなすだけの真面目さではもの足りません。自分から積極的に関わってゆく「真剣さ」がとても大切です。

苦労もありますが、成果が得られたときの充実感や達成感には計り知れないものがあります。

このように高度な専門的知識を得たりその経験をして立派に卒業した後には、それを仕事に生かすことが待っています。

大阪大学を卒業した人々は、企業や大学などで活躍し指導的立場に立つ方も大勢います。

大切なことは、外部から押しつけられた「真面目」ではなくて、阪大学生自身の内部から自発的に生まれ出てきた「真面目」だという点です。

《教授について》

阪大の教員は真面目か。

確かにそうかもしれません。なぜだか、分析してみましょう。

一つには、理系学部が多いことによります。阪大はもともと医・理・工の三学部で出発した大学です。

現在は法学部も経済学部も文学部もある総合大学ですけれど、学生比率も教員比率もやはり理系に重心がかかるっています。

ではなぜ理系が多いと「真面目」か。

理系は論理が柱です。個人の性格の上ではいい加減な教員もいっぱいいますが（かくいう私も、その点では人後に落ちませんが）、仕事の上では論理を貫かなくてはなりません。

1+1は3だといったら、芸術なら独創的とほめられますが、科学ではバカといわれます。

誰がやっても2です。クソマジメでつまらないといわれても、これを崩すわけにはいきません。

また、理系は知識の積み重ねが必要です。個人の才能だけではどうにもならないところがあります。

伝達すべき情報は増える一方なのに、休日は増えるし土曜日は休みだし、授業時間が足りません。いきおい、休講はありえず授業は定刻に始まり、終わりは定刻を超えることも少なくない。これを外からみればキマジメとしかいいようがありません。

さらに、理系教育は実験が重要です。実験・実習には、材料や器具・機械の準備が必要です。ふらっと来て、気ままに実験して飽きたら帰る、なんてことはできません（文系はそうだという意味ではないけれど、教育システムとしては、文系よりはるかにスケジュール重視になります）。

したがって、その点からも休講なんてありえません。同じことともいえますが、理系の研究は紙と鉛筆があれば十分、ということは稀で、技術が必要です。

その技術の伝授には現場指導が不可欠です。だから高学年や大学院では少人数指導になり、そうなると教員は（学生も）連帯感が強まってサボらなく（サボれなく）なります。

もう一つの、意外に大きな理由は立地条件です。盛り場から遠く、誘惑が少ない。

東大なら駒場キャンパスは渋谷の隣だし、本郷キャンパスは池袋にも銀座にも近い。京大、北大は京都、札幌の町の中心にあります。

昔は阪大も大阪都心にあったのですが、今は郊外です。飲みに出ようがない。

それでも豊中キャンパスには阪急石橋駅周辺の商店街があるけれど、吹田キャンパスの隣りは万博公園ですから、夜になったらフクロウとタヌキしかいません。

駅から遠いと車で通勤することになり、飲めない。教員は（学生も）好むと好まざるとにかかわらず、研究に没頭できるわけです。

それで、かどうかわかりませんが、多くの研究室では折りに触れ、ゼミ旅行や新人歓迎お花見や卒業生歓送行事を企画して日頃の飲み足りなさを取り返します。

統計がないのでわかりませんけれど、ゼミ行事率なら阪大はトップクラスではないでしょうか。

というわけで、結論。阪大の教員は、心底真面目かどうかは大いに疑わしいけれど、少なくとも「見かけ上は」確かに真面目です。